

参加者が会話を通じて
得られる経験

どのような会話においても、いつ話し、いつ聞くかという発言のタイミングは、一人ひとり違います。同じ会話であっても、参加者が会話への参加を通じて得られる主観的な経験は、参加者一人ずつ異なるのです。また、一言で会話と言っても、笑いが絶えない会話、しんみりとした会話、多くの参加者が発言する会話、参加者のうちの一部が掛け合いのように発言する会話など、いろいろな種類があります。

高齢になると認知機能は低下しやすくなりますが、聞くことと話すことのバランスが取れた会話は、その認知機能を活用することにつながります。この考え方に基づいて、リハビリ効果が期待できる双方向の会話ができるよう支援する際、会話が結果としてどのような流れで進んだか、その中で一人ひとりがどのような役割で会話に参加したかを記録することが重要です。

そこで、誰がどのような役割で会話に参加し、周囲の人がどのように反応したかを記録し、会話への参加と盛り上がりを測る方法「会話双方向性計測法」を考案しました。これは、テーマを決めて写真を持ち寄り、時間と順序を決めて会話をすると共想法プログラムにおける会話の評価のために開発した手法です。話題提供者がはっきりしているもの

であれば、パネルディスプレイの盛り上がりなど、他の形式の会話を計測することもできます。そして、日常会話の場で簡便に実施できるよう、紙と鉛筆と赤色のペンがあれば測れるように、工夫しています。

ここでは、実際の会話を例に、紙と鉛筆と赤色のペンを使って記録し、会話への参加の仕方と会話の盛り上がり具合を表す得点を計算する手順を示します。

会話の流れを記録する

図1は、共想法プログラムにおいて、サンゲラスをかけた犬の写真(写真1)が映し出されたスクリーンを囲んで、6名の参加者が会話している様子です。表1は、この写真を用いた話題提供と、質疑応答の時間における会話を抜粋したものです。発言番号1は話題提供、2以降は質疑応答における発言です。記録のため、話題提供順に参加者に番号を振ります。写真1を用いて話題提供をした人は4番目に話題提供したので④、この他の参加者は①②③⑤⑥で、⑦は司会者です。以下、4つのルールに沿って会話の流れを記録します。

ルール1 話題提供者の番号と題名を
会話状態記録用紙の中心に書く

図2に、会話状態記録用紙を示します。真ん中に楕円があり、左右に計算のための表があります。真ん中の楕円に、話題提供者の番号

参加と盛り上がり を測る 会話への

第6回

前回は、①テーマを決めて写真を持ち寄り、話し手の写真を映し出し、②時間と順序を決め、話し手と聞き手を明確にする、という2つの特徴を持つ共想法プログラムにおいて、参加者が会話をよく聞いて記憶したかを確認、実施結果を記録する方法を紹介しました。今回は、参加者ごとの会話への参加の仕方と、会話の盛り上がり具合を測る「会話双方向性計測法」について紹介します。

東京大学 人工物工学研究
センター 准教授、
NPO法人ほんのぼの研究所
代表理事、
科学技術振興機構
さきかけ研究者

●大武美保子